

ライフステージに合わせた特別支援学級・学校の教育課程の在り方

—縦と横の支援の連続性と多様性を考える—

特別支援教育研究会議

研修員 中村 めぐみ(川崎市立中央支援学校 教諭) 池田 靖(川崎市立百合丘小学校 総括教諭)

白川 遥(川崎市立菅中学校 教諭)

指導主事 伊藤 琢也(特別支援教育センター)

I 主題設定の理由

1 特別支援教育をキャリア発達の視点から再考する

特別支援教育に求められる視点として、「障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する」¹が挙げられている。この視点は、児童生徒が学齢期や青年期をどのように豊かに過ごしていくか、具体的な育ちの姿としてイメージしたキャリア発達²を教育の柱にしていることを示すものである。学校はこれまでも、各校種の強みや児童生徒一人一人の発達段階³に応じた取組をしてきた。

川崎市では、平成27年度より実施される「かわさき新教育プラン」で、「キャリア在り方生き方教育の推進」⁴を施策として掲げており、今後もキャリア教育はその重要性を増してくると考えられる。本市ではキャリア在り方生き方教育の3つの視点として、①「自分をつくる」②「みんな一緒に生きている」③「わたしたちのまちかわさき」を掲げその実施に向けて、教育課程全体の充実が図られていくこととなる。

2 ライフステージに応じた連続した「縦の支援」

特別支援学級(学校)は、障害のある児童生徒が、一人一人の能力や可能性を最大限に伸ばし、地域で自立・社会参加するための基盤となる生きる力を培うため、一人一人の教育的ニーズに応じて、適切な指導及び必要な支援を行うことができるように設置されている。その指導にあたっては、一人一人の課題に応じた個別の教育支援計画(本市では「サポートノート」)及び個別の指導計画を作成し、意図的・計画的な教育課程が編成されている。また、必要に応じて通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習も行いながら、将来の自主・自律を目指している。

本来、特別支援学級(学校)では、卒業後の社会参加と自立を目指して、従来から「自立活動」「生活単元学習」「作業学習」等を教育課程の中に位置づけている。そして、個々の障害の種類や程度または発達段階に応じて取り組んできた。しかし近年、小学校(小学部)1年、中学校(中学部)1年、高等部1年への移行期では、いわゆる「小1プロブレム」「中1ギャップ」「高1クライシス」と言われる「支援環境の大きな変化」や異校種間における学校風土や担当者の「指導観・教育観」の差異などから、積み上げた支援が途切れていることが指摘されている(図1)。障害のある児童生徒の発達段階を踏まえて、今私たちには、以下の2つの視点⁵を持つことが求められていると考えられる。

<視点1> 発達(精神)年齢に沿った段階

<視点2> 生活年齢に沿った段階(学校種や就労先などのライフステージ)

例えば、小・中学校に入学する前に、

「(小学生なら)ひとりでトイレに行ける。」

「(中学生なら)ひとりで制服の着脱ができる。」

「障害があるからこの活動(行事)には、参加しなくてもよい。」

といったイメージを学校や保護者が持っていることも、連続した支援を難しくしている一因とも考えられる。こういった状況は、特に小・中学校特別支援学級が設置されている各学校種の学校風土に大きく影響

¹ 「特別支援教育に関する中央教育審議会答申」文部科学省 平成17年12月

² 人間が社会の中や自己のおかれた環境の中で、その時期にふさわしい能力を身に付け、成長していく過程

³ ジャン・ピアジェ(Jean Piaget)が提唱した「発達段階説」

⁴ 「かわさき教育プラン 第3期実行計画の延長及び次期プラン策定に向けた考え方 概要版」川崎市教育委員会 H26年3月

⁵ 「キャリア教育の視点からみた授業づくり」岩手県総合教育センター特別支援教育室 2007年

をして、前頁<視点1>に重きが置かれているのではないかと推察される。

このように、校種間で起きている問題について、幼稚園・保育園、小学校(小学部)、中学校(中学部)、高等部で児童生徒の発達をつなぐという視点に立って連携を再検討する必要がある⁶。つまり、児童生徒の発達は、校種に合わせて発達するのではなく、一人一人の発達段階に合わせて連続的に発達するということを踏まえ、児童生徒のライフステージに応じた育ちを俯瞰的に見ていくことも重要であると考え(図2)。そして、発達段階の2つの視点をバランスよく統合して、児童生徒の発達(精神)年齢に沿った段階を踏まえながら、生活年齢に沿った段階(学校種や就労先などのライフステージ)に応じて自分らしく成長していくことを支援することが必要である。つまり、各学校種の強みを生かしながらも<視点2>、児童生徒の能力に応じて可能性を引き出す工夫<視点1>が求められている。このことは、先に述べた児童生徒のキャリア発達に通じるものである。



図1 「子どもの発達をつなぐ際、校種間に起きている問題」

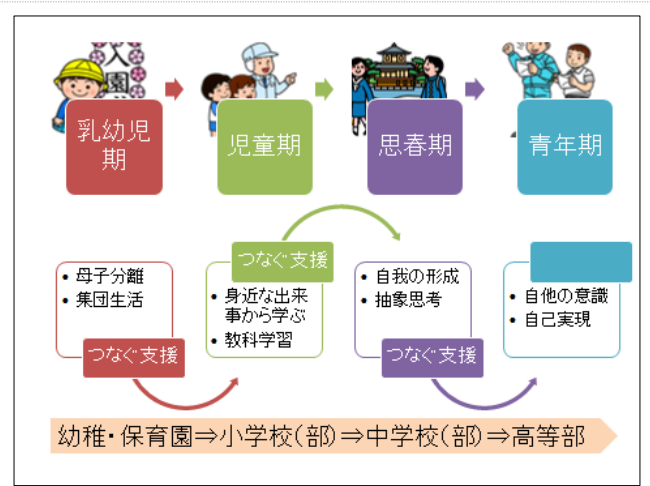


図2 「発達段階に応じた連続した学び」

3 ニーズの多様性に応じた「横の支援」

現在、特別支援学級(学校)は、在籍する児童生徒の障害の程度が重度重複化する傾向にある。また、特別支援学級には、比較的軽度の知的障害の児童生徒の在籍も増加している。特に自閉症・情緒障害特別支援学級の児童生徒の在籍者の増加に伴い、支援ニーズが極めて多様化している中で、担当者が教育課程を編成し一人一人に応じた指導をすることが難しくなっている。

平成25年度 川崎市総合教育センター特別支援教育研究会議⁷では、「特別支援学級の集団を生かした授業づくり」の報告がされている。鳥羽 他(2015)は「個別のスキルを向上させていく個別の学習や支援をベースにし、集団の中でかかわり合いながら生きていく力を伸ばしていくことが重要である。」と述べている。

本研究会議でも引き続き、児童生徒の障害の程度に合わせながら、学びや参加の多様性を生かした教育課程を編成し、具体的な支援や手だてを講じる中で、ニーズの多様性に応じた「横の支援」を検証した。

II 研究の内容

1 「朝の会」の校種間の実態把握

本研究会議では、ライフステージに応じた「縦の支援」及びニーズの多様性に応じた「横の支援」を検証するために、小学校(部)から高等部を通じて日々一貫して行われている日常生活の指導の一場面である「朝の会」を研究の場として取り上げた。

また、本研究会議では、日常生活の指導における指導目標を次のように設定した(表1)。

⁶ 福島県教育センター 生徒指導・教育相談に関する校内研修実践資料集「校内研修実践資料(中学校版3)『児童生徒の発達をつなぐー発達課題、校種間連携の理解を通してー』」を参考に作成

⁷ 鳥羽美津代他「特別支援学級の集団を生かした授業づくり-子どもたちが互いにかかわり合う授業展開を目指して-」

表 1 日常生活の指導における指導目標

小学校(部)段階	基本的な生活習慣の確立(日常生活の充実や高まり)
中学校(部)段階	小学校(部)段階で身に付けた基本的な生活習慣の定着を図るとともに、生活年齢を配慮しながら、集団生活への適切な参加を図る
高等部段階	中学校(部)段階で身に付けた基本的な生活習慣の確立と自立を目指すとともに、一人一人の就労や自立の具体的な姿をイメージしながら、社会生活の主体的な参加を図る

その上で、朝の会の題材のねらいとして、

- ① 学校生活の見通しと期待感を持つ
- ② 学級の一員としての自覚を高め、相互に役割を担いながら、会を進行する

と位置付けた。

検証の進め方は、市内小・中学校、小学部(知的・肢体)・中学部・高等部(本校・分教室)抽出校⁸の朝の会をビデオで撮影し、朝の会における学習活動について下記の視点で観察した。本研究会議で「朝の会観察シート」を作成し、教師の支援方法及び児童生徒の表現活動を分析した。分析方法は、授業開始から終了時までの教師および児童生徒の表現活動をチェックした。行動の観察期間をインターバルに分け、インターバルの終わりに教師の支援及び児童生徒の表現行動が生じたか(+)、生じなかったか(-)を観察し、行動が生じたインターバルのパーセンテージで表す方法である。時間のインターバルは 30 秒とする。2名の観察者で観察を行い、共に一定の表現活動が見られると見解が一致した場面をカウントした。

時間	内容	教師の支援						児童生徒の表現活動										
		みんなに			誰かに			音声(話す)			視覚(見せる)			身体(動く)				
		音声	視覚	身体	音声	視覚	身体	みんなに	誰かに	みんなに	誰かに	みんなに	誰かに	みんなに	誰かに	みんなに	誰かに	
00:29	00:29 号名 挨拶																	
00:59	00:59 週末の過ごし方 生徒1(日直)																	
01:29	01:29 生徒2																	
01:59	01:59 生徒3																	
02:29	02:29 生徒3																	
02:59	02:59 生徒3																	
03:29	03:29 生徒4																	
03:59	03:59 生徒4																	
04:29	04:29 生徒5																	
04:59	04:59 生徒5																	
05:29	05:29 今日の予定																	
05:59	05:59 今日の予定																	
06:29	06:29 今日のタイムアップ																	
06:59	06:59 今日のタイムアップ																	
07:29	07:29 今日のタイムアップ																	
07:59	07:59 今日の健康																	
08:29	08:29 今日の健康																	
08:59	08:59 ハンカチ調べ、先生の話																	
09:29	09:29 先生の話																	
09:59	09:59 先生の話																	
10:29	10:29 先生の話																	
10:59	10:59 先生の話																	
11:29	11:29 先生の話																	
11:59	11:59 号名 挨拶																	

図3 朝の会アセスメントシート

また、児童生徒の中心課題が異なる中で、それぞれの校種でどのような朝の会が行われているか、量的・質的の2つの視点から教師・児童生徒の活動分析をしていくことで、各校種で教師がどのような関わり、児童生徒がどんな役割を担い、表現しているかを調査することで、「縦の支援」と「横の支援」の現状と課題を明らかにした。

＜「朝の会」における教師の支援方法及び児童生徒の表現活動の視点＞

(1) 量的観察の視点

- ① 先生(教師)の話
- ② 教師の支援((音声(話す)、視覚(見せる)、身体(動く))*ア みんなに イ 誰かに
- ③ 児童生徒の役割(日直、その他)
- ④ 児童生徒の表現活動(音声(話す)、視覚(見せる)、身体(動く))
*ア みんなに イ 誰かに ウ みんなで(合わせて)

※視覚(見せる)表現は、「板書・掲示物」や「ICTの活用」等を含み、身体(動く)表現は、「お辞儀する」「挙手する」「握手する」等の表現活動とした。

(2) 質的観察の視点

- ① 内容や流れ
- ② 児童生徒の理解(児童生徒の「発達段階」に適切であったか)
- ③ 集団や他者との関わりを意識したものか

2 研究の仮説

本研究会議では、以下の3点の仮説を持って検証を進めた。

- (1) 発達段階の適切な理解(順次性や適時性)がなされていたか(表1)＜発達段階＞。
- (2) 学校風土の良さを活かされていたか＜学校風土＞。
- (3) 小学校(小学部)では、将来の自立の姿をイメージできていたか。一方、中学校(中学部)、高等部では、「自立・就労」というゴールに向けて支援を急ぐ傾向はないだろうか＜自立・就労＞。

⁸ 抽出した小・中学校特別支援学級は、知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由、病虚弱特別支援学級であり、それぞれの学級種別を合わせた合同授業による「朝の会」である。また、特別支援学校(小学部(知的5・6年生 在籍)(肢体1・3・4・6年生 在籍))、中学部・高等部は2年、高等部分教室は3年)は、各知的障害教育部門、特別支援学校肢体不自由教育部門で行われる「朝の会」である。

II 研究の結果

1 朝の会の実態把握から見えてきた成果と課題

抽出した各校種における教師の支援方法及び児童生徒の一単位時間の表現活動を分析した結果は以下の通りである(表2)。

(1) 量的観察の視点

表2 「朝の会」における教師の支援方法及び児童生徒の表現活動(単位は、%。全体時間に対する割合を示す)

	先生 の話	教師の支援						児童生徒の 役割		児童生徒の表現活動								
		みんなに			誰かに			日直	日直 以外	音声(話す)			視覚(見せる)			身体(動く)		
		音声	視覚	身体	音声	視覚	身体			みんなに	誰かに	みんなに	みんなに	誰かに	みんなに	みんなに	誰かに	みんなに
小学部(知)	3.9	59.2	0.0	16.2	96.9	86.2	48.5	96.9	53.9	59.2	53.9	53.9	53.9	0.0	0.0	16.2	53.9	53.9
小学部(肢体)	0.0	96.2	60.6	14.3	21.4	67.7	96.2	71.3	24.9	39.2	0.0	24.9	24.9	32.1	0.0	32.1	21.4	49.9
小学校(特別支援学級)	6.4	46.1	30.1	16.0	56.1	16.0	40.1	32.1	68.1	22.0	22.0	58.1	8.0	0.0	16.0	0.0	32.1	54.1
中学部	15.2	67.7	16.9	0.0	46.5	67.7	0.0	76.2	80.4	84.6	4.2	46.5	38.1	0.0	0.0	33.9	0.0	21.2
中学校(特別支援学級)	53.0	52.6	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	73.7	31.6	63.2	21.1	21.1	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	21.1
高等部	29.2	45.0	16.9	0.0	56.2	2.8	0.0	53.4	39.4	30.9	22.5	11.2	14.1	19.7	0.0	22.5	0.0	5.6
高等部(分)	59.2	59.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.5	19.7	9.9	19.7	19.7	9.9	0.0	0.0	0.0	29.6	19.7

(2) 質的観察の視点

①内容や流れ

小学部(知・肢)	小学校	中学部	中学校	高等部	高等部分教室
①おはようの歌 ②呼名(歌) ③日時・予定の確認 ④歌(選択)	①じゃんけんゲーム ②お隣さんの肩たたこう(活動) ③挨拶 ④あなたのお名前は(呼名) ⑤今日の日付・天気 ⑦今日(月)の詩・歌 ⑧今日の予定(配布)	①挨拶 ②週末の過ごし方 ③今日の予定 ④今日のタイムケア ⑤今日の給食 ⑥ハンカチ調べ ⑦先生の話	①挨拶 ②今日の予定 ③今日の目標 ④先生の話	①挨拶・出席の確認 ②今日の日付・予定の確認 ③スクールバスの確認 ④ハンカチ・爪の確認 ⑤今日の給食 ⑥今朝のニュース ⑦先生の話	①挨拶 ②出欠確認 ③今日の予定 ④今日の給食 ⑤昨日のニュース ⑥先生の話

②児童生徒の理解(児童生徒の「発達段階」に適切であったか)

小学部(知・肢)	小学校	中学部	中学校	高等部	高等部分教室
①一人一人が役割を担えるような、身体的な支援 ②児童が1対1で関わる場面がある ③一日の始まりが楽しい歌で始まる習慣づけになっている ④発語がない児童への視覚的・音声的な支援(スーパートーカーなどのICTの活用)	①一人一人が役割を担えるような、身体的な支援 ②児童が1対1で関わる場面があり、言語的・身体的表現活動が多様である ③教師も学級集団の一員として、全員が数々のアクティビティに参加する	①生活年齢を尊重し、日直の役割が多くなっている ②生徒が全体に自分の言葉で話す機会が作られている ③発語が少ない生徒への視覚的・音声的な支援(iPadなどのICTの活用) ④教師の支援も言語的なものが多い ⑤ハンカチ、爪の確認など、ADLの自立に合わせた内容がある	①生活年齢を尊重し、日直の役割が多くなっている ②生徒が全体に自分の言葉で話す機会が作られている ③教師の支援も言語的なものが多い ④ハンカチ、爪の確認など、ADLの自立に合わせた内容がある	①生活年齢を尊重し、日直の役割が多くなっている ②生徒が全体に自分の言葉で話す機会が作られている ③教師の支援も言語的なものが多い ④ハンカチ、爪の確認など、ADLの自立に合わせた内容がある ⑤社会への関心について、話題にする機会がある	①就労・自立に向けて、日直の役割が多くなっている ②生徒が全体に自分の言葉で話す機会が作られている ③教師の支援はみられない ④社会への関心について、話題にする機会がある

③集団や他者との関わりを意識したものか

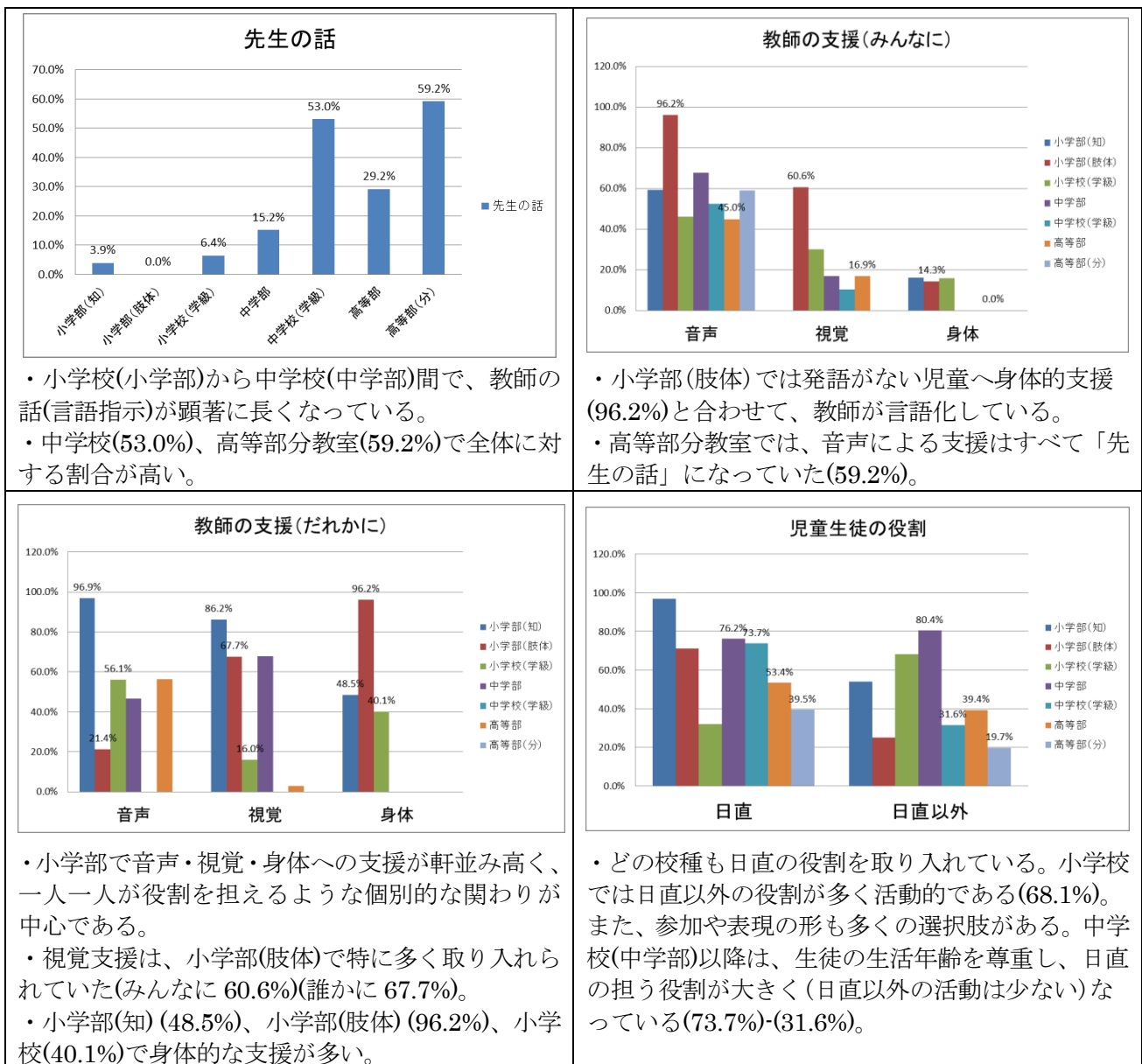
小学部(知・肢)	小学校	中学部	中学校	高等部	高等部分教室
・1対1の関わりを重視 ・教師も集団の一員となる	・1対1の関わりと合わせて教師も含む学級全体で楽しむ活動となる	・日直の役割が集団のリーダー的役割になっている ・言語的関わりが主	・日直の役割が集団のリーダー的役割になっている ・言語的関わりが主	・日直の役割が集団のリーダー的役割になっている ・言語的関わりが主	・日直の役割が集団のリーダー的役割になっている ・言語的関わりが主

2 研究の仮説から

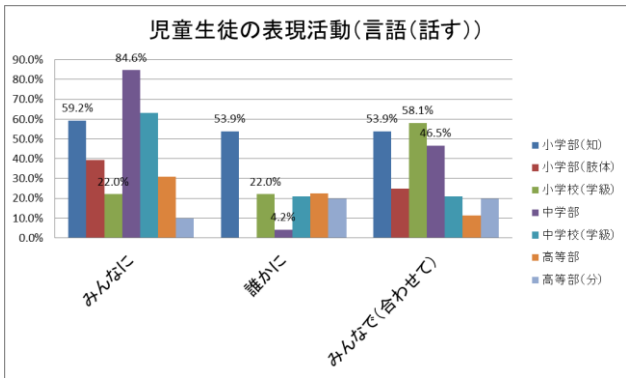
(1)「発達段階の適切な理解(順次性や適時性)がなされていたか<発達段階>。」

各校種で教師がどのような関わり、児童生徒がどんな役割を担い、表現しているかをまとめた(表3)。それぞれの校種で、児童生徒の障害の程度や能力に応じて適切な支援方法が用いられており、児童生徒の表現活動においても、音声・視覚・動作等多感覚の表現を引き出していることがわかる。また、発語がない児童生徒へのICTの活用(中学部では、iPadアプリ「Sounding Board⁹」を活用)が進んでいる。これによって、すべての児童生徒が日直として会を進めることができるなど、多様な児童生徒の実態に合わせた参加の仕方や表現方法を保障し、順次性や適時性に沿った「横の支援」を可能にしている。

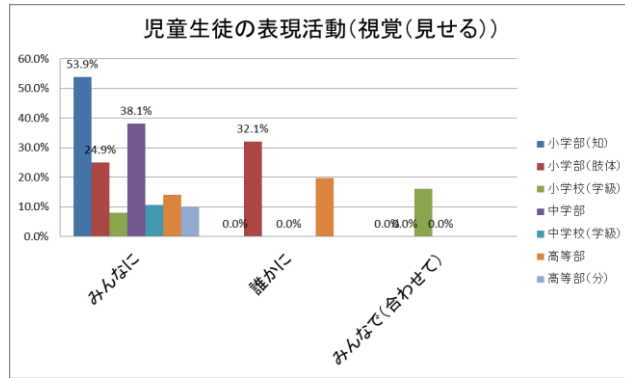
表3 教師の支援方法及び児童生徒の表現活動からの考察



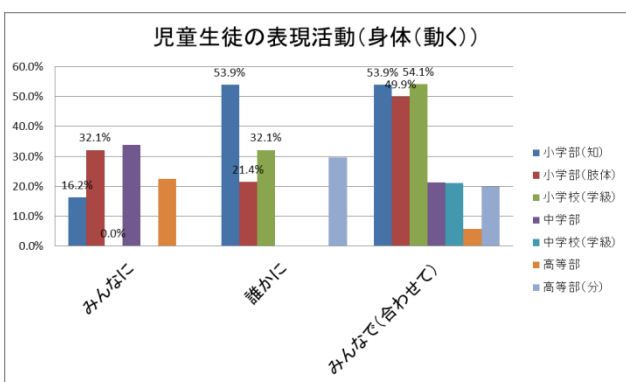
⁹ 画面上に表示された絵カードをタッチすると音声が出る、いわゆる VOCA の機能を持った iPad 用のアプリである。



- ・小学部(知)で1対1の言語活動が多く(53.9%)、小学校でみんなで合わせる言語活動が多い(58.1%)。
- ・中学校では、生徒の表現活動のうち、みんなに自分の言葉で伝える活動が増える(63.2%)。



- ・小学部(知)では、誰かに向けて話すことが多い(一人一人の繋がり)(53.9%)。中学部、中学校では言葉でクラス全体に話したり伝達したりすることが多い中学校(63.2%)、中学部(63.5%)。



- ・小学部と小学校で児童の身体表現活動が顕著に多いことがわかる。このことは、児童の発達段階において、自分の気持ちを表現することの難しく、集団参加に課題のある児童に対しても、「朝の会」の多様な参加を保障していると推察される。具体的には、誰かにまたはみんなで合わせた活動が多く、歌や手拍子、活動を含んだ表現を重視している(小学部(知的)(53.9%)、小学部(肢体)(49.9%)、小学校(54.1%))。

(2) 「学校風土の良さを活かされていたか<学校風土>。」

校種間の教師の支援方法、児童生徒の表現活動を分析していくと、小学校(小学部)と中学校(中学部)・高等部間で、「日直の担う役割が大きくなる」「教師・児童生徒の支援方法・表現活動において、音声(話す)で伝え合う活動が増える」の傾向がみられた。

(3) 「小学校(小学部)では、将来の自立の姿をイメージできていたか。一方、中学校(中学部)、高等部では、「自立・就労」というゴールに向けて支援を急ぐ傾向はないだろうか。<自立・就労>。」

小学校(小学部)では、基本的な生活習慣の確立(日常生活の充実や高まり)や詩の朗読や歌などの活動を通して、集団生活への適切な参加を促す活動が用意されていた。一方、中学校(中学部)・高等部では、当日の活動内容の確認など、見通しや目的を持って学校生活を過ごすための活動が多く取り入れられていた。

III 研究の成果と課題

1 校種間の特色を生かしながら連続性を考える「縦の支援」

研究の仮説と結果から、大きな違いはみられなかったが、校種が上がるにつれて、

- ①「日直の担う役割が大きくなる」
- ②「教師・児童生徒の支援方法・表現活動において、音声(話す)で伝え合う活動が増える」
- ③「当日の活動内容の確認が増える」など

小学校(小学部)と中学校(中学部)・高等部間で、校種間における学校風土や担当者の指導観・教育観(または職業観)の差異があると考えられた。

2 児童生徒の多様性を生かす「横の支援」

学校では、一人一人の児童生徒の障害の程度や能力に応じて適切な支援方法が用いられており、児童生

徒の表現活動においても、音声・視覚・動作等多感覚の表現を引き出していることがわかった。また、ICTの活用によって、発語がない児童生徒が日直として朝の会を進行したり、自分の考えを表現したりすることで、集団生活または社会生活への主体的な参加に導く一助になっていた。

3 モデルプランの提案

3名の異なる障害種(知的、肢体、自閉・情緒障害)を想定し、小・中学校(小・中学部)の「朝の会」を通じて、ライフステージに応じた連続した「縦の支援」とニーズの多様性に応じた「横の支援」の提案をした。

特に、幼稚園・保育園から小学校への移行期と小学校から中学校への移行期については、「スタートカリキュラム」¹⁰を導入するなど、丁寧な移行支援を計画していくことが大切である。

(1) 「縦の支援」を考慮した活動(例)

内容	小移行期	小中	小高	中移行期	中	高移行期
(1) 準備・支度・衛生等	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒にカバンから物を出し、決められた場所におく(やっってもらふことも) ・体操着をたたむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンカチ・ちり紙・爪の確認 ・アルコール消毒 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で一緒にカバンから物を出し、決められた場所におく 	<ul style="list-style-type: none"> ・身だしなみの確認(お互いで確認) 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の始まる前に、必要な準備を済ませておく 	<ul style="list-style-type: none"> ・制服を着こなす
(2) 日付・天気・給食・連絡事項・スケジュール確認	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳に、日付・曜日・天気を書く ・大まかなスケジュールの確認(絵カード、写真、トーカーの利用) 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳に、起床時刻・登校時間を記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別のスケジュールを確認(文字の表示) ・メニュー(活動)を読み上げて伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳に、今日の予定、担当してくれる先生の名前を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が今日の活動に目的や目標を持つことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が今日の活動に目的や目標に対して、自己評価することができる
(3) 役割・日直	<ul style="list-style-type: none"> ・日直の輪番制 ・できることを、教師と一緒に。 ・友達の様子を見たり、マネしたり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の支援を受けながら、一人で司会進行をすることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で会を進行する ・日付、天気などを書いたり、カードを貼ったりする(黒板) 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの友達に気を配りながら、会を進行することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の進め方や活動内容について、生徒が自分たちで選択できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の進め方や活動内容について、生徒が自分たちで決定したりする
(4) 習慣・あいさつ・着席・規律・	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶する ・名前を呼ばれたら、元気よく返事をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・「始めます」「終わります」が言える ・相手に体を向ける ・姿勢の保持 	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴しながら、相手の話を聴くことができる(アイコンタクト、相槌など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の生活目標の確認 ・「起立、気を付け、礼、着席」の挨拶のルール 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師や先輩などに対して、適切な場面で敬語をつかうことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴することができる ・疑問点を質問することができる
(5) 情緒・コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の読み聞かせ ・歌、詩の朗読 	<ul style="list-style-type: none"> ・週末の出来事を発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の目標や昨日の話を話す、聞くなどの時間を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニ SST ・アイスブレイク 	<ul style="list-style-type: none"> ・1分間スピーチ 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨日のニュースについて自分の考えを話す
(6) 遊び・ポディーイメージ・体づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び歌 ・リズム遊び ・リトミック 	<ul style="list-style-type: none"> ・ムーブメント的活動(物を使う) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンス、〇〇体操 	<ul style="list-style-type: none"> ・体づくり ・健康管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・階段昇降 ・ランニング 	<ul style="list-style-type: none"> ・持久走
円滑な支援及び自立・就労に向けた移行計画	①ADL・遊び・円滑な学校生活への意欲の向上から自立・就労へ					
	②指示・伝達・意思疎通 視覚支援(ICTの活用)から言語理解・表現へ					
	③教師の介助を受けながらの役割から自己選択・決定					

¹⁰ いわゆるスタートカリキュラムとは、児童が義務教育の始まりにスムーズに適応していけるようなカリキュラムを構成すること。(文部科学省 HP 現行学習指導要領・生きる力 Q&A 「6. 生活に関すること」より引用)

(2)「横の支援」を考慮した校種別活動(例)

小学部(約20分)	小学校(約30分)	中学校(約15分)
<p>1. はじめの挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日直がタブレット、VOCA、めくりプログラムなど、自分でできる手段で司会ができるように準備する ・なるべく児童が自分でできるように、見守る姿勢で支援をする ・言葉には簡単な手話、手サイン等を添える <p>2. おはようの歌</p> <p>3. 出席確認</p> <p>①日直が、写真カードを使って、名前を呼ぶ順番を決める</p> <p>②「タンバリンでおはよう」の歌で確認する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選ぶ活動には時間をかけ、児童の意思をしっかり確認する ・うまく選べない児童には、カードの枚数を減らして選びやすくする ・目が見えにくい児童には、カードにいろいろな素材を貼り、手触りでわかるような工夫をする <p>4. 予定の確認</p> <p>①日付、天気、一日の流れを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真や絵カード(シンボル、写真、イラスト)を使ってイメージしやすいようにする ・天気は、わかる児童にたずねて確認する <p>5. 給食の献立を確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の読み上げ、イラストで提示 <p>6. 頑張りたいこと・楽しみなことを言う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が応えやすいように担任がたずねる→自分で考えて言えるように支援する <p>7. 手遊び歌</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しい雰囲気になるように場を盛り上げる <p>8. おわりの挨拶</p>	<p>1. 今月の歌</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで声を出して歌う ・曲によっては打楽器を入れたり、布などを使ったりしてもよい <p>2. 朝のあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日直が号令をかけて、あいさつをする <p>3. 曜日、日付、天気</p> <p>日直または当番の児童が行う</p> <p>4. 健康観察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日直が一人ひとり名前を呼んで出席をとる ・名前を呼ばれたら、返事もしくは反応をする <p>5. 手遊び、わらべ歌、ゲームなど</p> <p>友達と関わるような遊びをする</p> <p>6. 今月の詩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月詩を決めて、全員で音読する ・動作を付けたり、読み方を工夫したりしてもよい <p>7. スピーチ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な話題について、クラス全体に話す機会を設定する。可能な児童が多い場合は、取り入れたい ・一人で話すことが難しければ、インタビュー形式でも。 <p>8. 今日の予定を聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大まかな一日の流れを聞く(交流など) <p>9. おわりのあいさつ</p>	<p>1. 朝の体操</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの顔が見える位置に座る ・曲を流して自然に始めていく ・待つこと、聞くこと ・生徒の主体性を尊重する ・教師も一緒に参加 <p>2. 朝のあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日直が進行する <p>3. 出席確認・健康チェック</p> <p>4. 今日のクイズ(今日のニュース)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日直が簡単な話題を考えておく <p>5. 詩の朗読</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語の学習や音読の宿題等との関連の中で ・立位で読ませたい <p>6. 先生の話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指示を正しく聞く <p>7. おわりのあいさつ</p> <p>※1. 2. 4. 5. などの活動が取り入れることによって、小学校からの移行をスムーズに支援する</p>
<p><指導の工夫></p> <ul style="list-style-type: none"> ・見通しを持ち、落ち着いて生活するために、一日の流れを知る ・日直が進行する(VOCA、めくりプロなどを活用) 	<p><指導の工夫></p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日行うことによって、児童が一日のリズムを作れるようにする ・一日の予定を知り、見通しを持つ ・友達と関わりながら、楽しく活動をする 	<p><指導の工夫></p> <ul style="list-style-type: none"> ・就労・自立に向けて役割を達成する力を育む ・社会の動きに関心を持つ ・一人一人を大切にすることを育てる

4 今後の課題

(1) キャリア発達の必要性

花熊(2014)は、「生きる力」という語にまとめられる力の育成が言われる背景には、一つには、共生社会形成の理念のもとに障害のある人たちの社会参加と自立をめざす流れが、もう一つには、ニート(若年不就労)や長期の引きこもりといった現代社会が抱える青年・成人期の問題がある」と述べている(図4)。つまり、児童生徒が自立した社会生活を送り、生活の質(Quality of life)の向上していくためには、学校は12年間の学校教育全体で一貫した支援によって育成する必要がある。学校教育卒業後の自立した社会生活につなげていくかは、学校種を問わず、すべての児童生徒が直面する共通の課題と考えられる。そのことから、今後、校種間・学部間の連携の在り方について、再考していく必要がある。

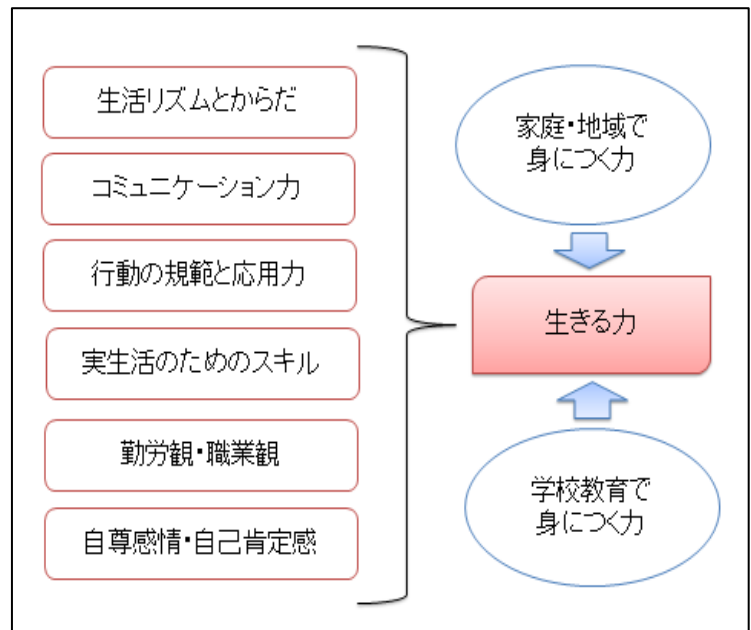


図4 花熊(2014) 現代社会における子どもの発達課題

(2) 校種間・学部間の連携の在り方

児童生徒の発達をつなぎ、ライフステージに応じた育ちを意図的・計画的に支援していくために、市内小・中学校、小学部(知的・肢体)・中学部・高等部(本校・分教室)で、校種を越えた連携の在り方を再考する必要がある。現在、各学校で行われている校内授業研究会を学区や地域の学校と協働して開催することで、互いの年間計画の作成、授業づくり等を学び合うことなどが考えられる。

また、特別支援学校では、学部間の連携も益々重要になってくると考えられる。愛媛大学教育学部附属特別支援学校では、目ざす教育全体像を提示しキャリア教育の観点に立った12年間の一貫教育を推進している。将来の社会的自立・就労に必要な「基本行動の確立」をしっかりと身に付け、生活の自信と生活意欲を育てていくことが中・高等部で取り組む働く意欲・働く力の育ちの基礎となると考え、その点で、小学部段階は非常に重要な時期であるという共通理解がある。このように、キャリア教育の理念を理解し、各学部で育てたい力を明確にし、学部間で年間指導計画や支援方法等の連携を図っている(図5)。

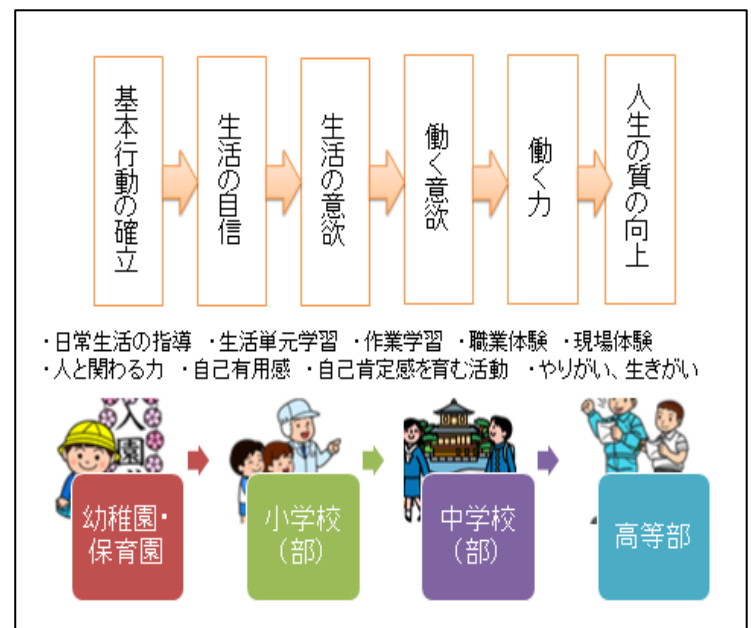


図5 将来の「働く生活」を実現する教育(愛媛大学教育学部附属特別支援学校の資料を参考に作成)

(3) 連携のポイント

校種間・学部間の具体的な連携の在り方については、以下の3点について検討した(図6)。

①各学校で開催している授業研究を地域の小・中学校・特別支援学校にも公開し、互いの指導実践や指導観、校種の強み等について互いに知る機会として、授業力や支援力の向上につなげていく。

②研究授業後の校内授業研究会にも一緒に参加していく。また、特別支援学校地域支援部等センター的機能を活かして指導助言者として参加することで、「一人一人の在り方生き方の形成」と「地域で育つために必要な力」について、確認していく機会とする。

③上記の実践を在籍校に持ち帰り、「個別の教育支援計画」「年間指導計画」「単元計画」等の確認・修正等を行い、教育課程・授業改善につなげていく。

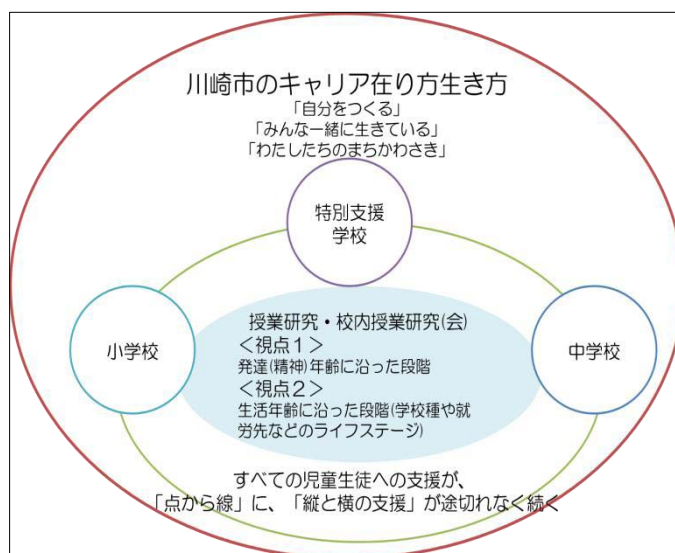


図6 校種間・学部間の具体的な連携の在り方

今後、すべての児童生徒への支援が「点から線」になり、「縦と横の支援」が途切れなく続くことが、本市の共生社会(共に生き、共に育つ環境を創り、心を育む)形成への一助になると考えていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申しあげます。

【参考文献】

- 『キャリア教育の視点からみた授業づくり』岩手県総合教育センター特別支援教育室 2007年
- 『将来の「働く生活」を実現する教育—キャリア教育に基づく支援内容・方法の検討』愛媛大学教育学部附属特別支援学校(著) 2011年
- 『特別支援教育の学習指導案と授業研究』子どもたちが学ぶ楽しさを味わえる授業づくり 鹿児島大学教育学部 肥後 祥治/雲井 未歆/片岡 美華 2013年
- 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 編著ジアース教育新社
- 『特別支援教育のための子ども理解と授業づくり』湯浅恭正・新井英靖・吉田茂孝編著ミネルヴァ書房
- 『1から始める自立活動 コミュニケーション力を育てる授業づくり』新井英靖監修 佐藤まゆみ著 明治図書 2013年
- 朝の会・帰りの会 基本とアイデア 184 桔梗 友行著 (ナツメ社教育書 BOOKS) 2014年
- 「平成26年度 学校公開日学習指導案」筑波大学久里浜特別支援学校(平成26年11月8日) 2014年
- 「キャリア在り方生き方教育の手引き」川崎市教育委員会総務部教育改革推進担当 2014年
- 「特別支援教育研究 11月号 No.687」東洋館出版社 2014年

【指導助言者】

川崎市立小学校特別支援教育研究会長(川崎市立下布田小学校長) 卯木 昌史
川崎市立中学校教育研究会特別支援教育部会長(川崎市立宮前平中学校長) 山本 浩之